



りんふく

## 林福連携による地域に開けた森林へ

### 社会福祉法人と森林 NPO がタッグ

私たちは、当麻町の「社会福祉法人かたるべの森」の所有林で活動しています。同法人は、この森を整備し、施設利用者(メンバー)たちと森の中で活動することを運営理念のひとつにしています。

同法人が森を購入した平成7年当時は、約22haの大半が背丈を超える高さの笹に覆われ、倒木も放置されたままの荒れた森でした。職員・保護者・メンバーとも、森林施業の経験も道具もない状態でしたが、少しずつ笹を刈ることから始め、徐々に林内でレクリエーションや体験学習・交流事業を開催できるようになってきました。森から倒木を担ぎ出してきて木工材料にしたり、間伐材で屋根を組んだピザ窯を作ったりする活動を通じて、地域との交流も進んできました。

しかし、メンバーたちが活動可能な面積は全体の1割程度にとどまっています。社会福祉法人単独では森林施業の担い手の育成もままならず、自分では限界でした。そこで、スキルと経験を持つNPO法人もりいく団が加わることになりました。

### 明るい森内で「かたるべ」

私たちは平成30年度からこの交付金事業に参加し、いま2年目です。4~5月は、森林の状態を把握するために、GPS装置を併用しながら林分の現況調査をしています。森全体の約6割を45年生のカラマツ人工林が占めていますが、ミスナラを主体とする天然林もあることが分かりました。

初夏には、主にカラマツ間伐後の林床で笹刈りをしています。地表に光を入れ、実生更新木の育成と下層植生の発生を促す作業です。2年にわたる笹刈りで、場所によっては、笹はかなり薄くなりました。育成木を誤伐してしまわないよう、樹木の周囲では刈り払い機を使わず、メンバーたちが手でササを刈っています。林内で見つけたエゾサンショウウオ産卵地の周囲は、笹を刈り残して保護しています。笹刈りをした場所に、作業道(幅2~4m、延長400m)と散策路(幅1m、延長350m)を造成しま

した。道路の維持管理作業にはメンバーたちも加わり、今までうっそうとして入るのも困難だった森が、安全で楽しい場所に変わってきました。

これらの作業道・散策路は、伐倒木の搬出に利用するのはもちろん、メンバーや近隣住民のみならずが散歩したり、マウンテンバイクやツリークライミングのイベントを開いたりするのに活用しています。「森を小中学生向けのキャンプ体験に使いたい」という要望が届いており、来年度からこうした事業を増やしていきたいと考えています。

森林作業中は原則立ち入り禁止にしていますが、福祉法人のメンバーや職員、役場職員などを対象に、不定期の見学会を開いています。ある日の見学会では、笹の刈り残しを見た方から「なぜこんなふうに?」と質問を受け、「ホウノキの若木を守るためです。ホウノキは10年で材木として使える太さになります」と説明しました。また別の方から「ヤマブドウが楽しみなので、ツルは切らないで」と要望されたこともありました。カラマツ人工林ではツル切りをしているのですが、場合によってはヤマブドウは残すというような柔軟性が必要だということですね。一緒に現場をながめながら、森の将来について意見交換する良い機会になっています。

持続的な「林福連携」は、林業と福祉、それぞれの専門家がそれぞれの得意分野で最大限の力を発揮し合って初めて実現する、と私たちは考えています。交付金事業終了後の維持管理や活動資金の調達の見直しは欠かせません。森の名前「かたるべ(語り合おう)」の通り、みんなで語り合いながら、だれかひとりに大きな負担をかけるようなことなく、また障害者・健常者の区別なく、みんなが交流できる場所を、この森に実現したいと思っています。



[当麻町]

も特定  
りいく  
非営  
く利  
団活  
動法  
人

【報告者】



福山寛人さん